

愛知県の緊急事態宣言発令から明日で二週間が過ぎます。本市においても感染拡大は、未だに予断を許さない状況が続いています。幸い、学校においては、陽性者が出て、保護者の皆さんの早めの対応や新しい生活様式の定着によって、校内における感染拡大を回避できています。今後も家庭の協力をいただきながら、着実に教育活動を進めていきたいと思いをします。

本日は、二点についてお話しします。

一点目は、働き方改革についてです。今や働き方改革は、錦の御旗の如く闊歩しつつありますが、教育現場には、安易に迎合できない実情があります。そもそも現場の感覚で言えば、費用対効果や生産の効率性の視点から業務を改善していくことは、教育には馴染みません。超過勤務時間縮減にこだわった拙速な働き方改革と学校現場で子どもたちに注がれる教育の熱量が、二律背反的な関係にあることは否めないのです。本来、この認識を肝に銘じて改革は進められるべきです。「これまでの働き方を見直し、教師が日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになる」という働き方改革の理念が、現場の教員に説得力をもって迎えられるためには、教育環境の改善が、勤務時間の縛りよりも先行していかなくてはなりません。それが伴わないと、働き方改革という大人側の都合のしわ寄せを、子どもたちに背負わせてしまうことにもなりかねないと思いをします。

二点目は、教育の両輪についてです。以前、ある大学教授から、理系の研究に比べて人文系の研究の補助金は、格段に少ないという愚痴を聞いたことがあります。理系には実験やフィールドワーク等が伴うため多額の経費が要ることを勘案しても、人文系はあまりに不遇なのだそうです。産学連携にしても理系学科ばかりだし、どうしても人文系への投資は少なく、それゆえに研究も進みにくいのだそうです。

いつ頃何で読んだのか記憶が定かではありませんが、「物質文明の急激な進歩に対して精神文化が追いつけていない」という文言が脳裏に強く残っています。歴史を振り返ってみれば、産業革命や文明開化、そして高度情報化社会といった具合に、文明の進歩には枚挙に暇がありません。しかしながら、それらの進歩の大半は、結果として大量消費社会を実現し、物質的な豊かさや刹那的な快感を誘うものでした。物や情報が多くなればなるほど、それらを理解し評価し、適切に選別するためには、受け手である私たちに、哲学や思想、宗教等に支えられた、確固とした価値観が必要になるはずで、す。にもかかわらず、経済行為に直結しない人文科学は、長い間疎かにされてきたように思われます。そしてその代償は、現代社会のさまざまな歪として顕現し、あるいは潜伏しているように思われてなりません。

義務教育に視点を移してみても、国際競争力の向上に資するための学力が重視され、特にPISAやT

I M S Sにおける理数の順位が問題視されました。あまつさえ国語教育においても、日本という国の言語文化、精神文化を継承させながら人格形成に資するという役割は弱まり、論理的思考力を支えるための言語力に偏重している観が否めないと感じます。産業振興を支える人材育成が必要なことに異論はありませんが、その両輪としての人間教育を進めていかないと、真の豊かな社会—— 幸福感の担保された社会は形成されないと考えます。おりしも来年度から小中学校全ての子どもに一人一台のタブレットが配備され I C T教育が本格稼働していきます。学習における効率化や個別対応化が期待されるようですが、子どもたちの未来の幸せを願うのであれば、学校教育では、今まで以上に、子どもたちを人や自然と深くかかわらせ、心を育てる教育活動を推進していくことが不可欠だと思います。